

『新可笑記』 卷四の一「船路の難儀」の検討

—「滅びの武将」源義経の都落ちと静・郷御前—

羽 生 紀 子

はじめに：「滅びの武将」の類聚

『新可笑記』の各章は、第一層（素材）を駆使して創作された第二層（本話）の換骨奪胎「虚」の面白さと、その上に重ねられた第三層（重層世界）の「実」の面白さを読み取って笑うという「二つの笑い」を創作意図とするものである。同時に、各章は前後の章と深く関連し、各巻で統一テーマを持ち、また全巻の構成も意図されている。巻一から巻三までの検討からは、『新可笑記』には明確な類聚方針があり、決して雑纂的な説話集ではないことがわかる。「武将逸話列伝」が意図されているというのが、これまでの検討から導き出した推論である。（注）

巻三は、鎌倉幕府の五人の執権とその逸話を重層世界とした「武将逸話列伝」であり、巻三の最終章である巻三の五「取りやりなしに天下徳政」は、鎌倉幕府第九代執権北条貞時による徳政令発布、霜月騒動・平禅門の乱の逸話が重ねられている。（金澤） 巻四の巻頭章は、第三層として鎌倉幕府の初期の武将源義経を重ねることで、巻三の最終章と連続性を持っている。さらに巻三の五と巻四の一とは話の構成パターンが類似しており、二話が連続したセットのような印象を受ける。巻三の五は、世の治め方（相对済令）—子の押し付け合い（異常さ）—子の成長・孝行—ある人の弁（郭巨の説話）—「父母に恨み起り」—出奔する。それに対して、巻四の一は、村方の治め方—妻同伴の遊里通い（異常さ）—娘の成長・不足なし—姥の告げ口（娘狂乱）

—魂呼びに「母を恨み心になり」—改心する、ということになる。西鶴は、このように類似した対応をさせることで、二章の解釈に一つの方向性を与えていると思う。巻三の五での子の押し付け合いという、一見したところの異常さは、重ねられた重層世界に気付くと、単なる異常とは言えないものであった。詳しくは後述することになるが、本章での妻同伴の遊里通いという異常さも、重層世界を重ね合わせると、それは必ずしも異常なものとはいえないものとなる。そこにそのような解釈を期待した西鶴の作意があるのであり、「異常さ」は本話解釈のシグナルなのである。

先に見通しを示すと、妻同伴の遊里通い（異常さ）というのは、第一層素材は、妻を残して城を脱出、妻たちは処刑されるというものである。第二層本話では、妻の執心により同道するが、やはり難産で死亡させる。そして第三層重層世界は、妻妾を連れて西国での再起を目指す、船路の難儀にあり、結局妾のみを取り残すという出来事である。素材が荒木村重の謀反で、重層世界として源義経の謀反という大事件が背景にあることに気付けば、その「異常さ」が、ある意味で異常ではないことになるのである。

巻四の巻頭章に、謀反という出来事によって滅亡した荒木村重（素材）を取り上げ、源義経（重層世界）を重ねていることは、巻四に「滅びの武将たち」の逸話の類聚という意図があるとみることができる。続く巻四の二から五にも「滅びの武将」が重ねられていることについては順次検証していくが、それらの武将たちの「滅び」とその原因を追究するのが、巻四の主題であるといえる。巻四の一では、本話に「私ありし」とされる、好色「執心」の問題なのである。

第三層重層世界の源義経については、本章とのかかわりは、従来まったく指摘されていないが、第一層素材の荒木村重については、広嶋進氏が頭注で触れている。^{注3}しかし後に触れるように、本話における素材としての重要性、その異常さに注目することはなかった。本稿では、この不可解で違和感を抱く出来事に注目して、第一層である素材を吟味し、また第二層である本話を検討し、第三層の重層世界および主題を明らかにする。

あらずじ…執心せず「物には良い加減といふ考へあるべし」

これまで本話を前後二つの段落に分けて論じているが、素材との対応を考慮して、前半をさらに二つに分け、①から③の三段落として、あらずじをとる。^(注4)

①「古代、摂津の国伊丹の城主に仕へて、郷方の支配して、何某とて勘定に発明なる人ありける。殿にも御ためよく、百姓にも痛まざる納め方、世の中はかくありたき物ぞかし」。

郷方の役人が私欲に走るのは、里人が賄賂を贈り「無用の出入り」をしかけ、自分に有利なように計らうからだ。それ
も自分の物ではなく、小百姓に割り付けて贈るのだ。米は国主に納め雑穀を食するのだから憐れみをかけなければなら
ないが、かといって放任し過ぎると我がままになる。「物には良い加減といふ考へあるべし」。年貢の取り方もその年の不作・
豊作によって「用捨あるべし」。欲を離れ、一人の心で万人を助けてこそ道理にかなうのだ。「この外なる事に願ひしてそ
の身を奢らば、正しく天これを咎め給ふべし」。武士の生活というものは、女房や娘が内証遣いを「過ぐる」もので、そ
の結果、肝心の武役に事欠くのである。この代官は「その難一つもなく」大役を果たしたが、「美女のもてあそびやむ事
なく、末はこれにて身の果つべき始めなり」。

②神崎の里に遊君を集めてた、中町の長者という人は、「高倉院の御時、斎藤滝口に相慣れし横笛が母なり」。横笛は「大方
無双の能者」で、「建礼門院の端者」^{はしたもの}として仕え、「世に情けの深き事、『盛衰記』に見えたり」。その縁で、神崎は今も「岸
の柳のいつなり」と遊女との波枕を交わす所である。代官は「抜け道をこしらへ」て夜ごとに通ったが、妻が深く嫉むので、
「遊女は仮なる者にして、夢に酒酌み、現に歌舞を聞くのみ。更に誠は」なく気晴らしに過ぎないのだから「そなたもいざ」
と宥めすかして、それからは妻を同道することにした。「これほど執心深き女は、世に女もあるに、勝れての因果なり」。

ある時、その通いの船中で妻が産気づいてしまった。「恥ならぬ事を深く隠し給ひて、かかる難儀をみる事ぞ」と嘆く

うちに、何とか娘を平産したが、「これは片寄せ」、母は亡くなってしまった。「沙汰せず屋形に帰り、宿にてかくなりゆく首尾にもてなし」た。「この妻はいやしくも嫉妬よりその身を失ひける。女の胎前に住家を出づる事仮にもなかれ。これ不覚の第一なり」。

③娘は乳姥の手で十四歳まで育ち、何一つ不足なく、同じ家中の何某との縁組も決まった。娘は母は病死だと思っていたが、姥から母親の「船にて難儀の最期」を聞かされて狂乱し、「母の事暫時も言ひやまず」。色々養生してもかいがなく、父はこれを苦にしてまもなく死んでしまい、家は絶えた。「武士の私ありしゆゑなり」。

仕えていた人々は去り、狂乱した娘だけが取り残された。縁組していた婿の方へ引き取られるが、「母に愁嘆日々につのり」、「各々あぐみて内談とりぐ」であつたところ、「物ごとに工夫深き人」が、この病は医術では治るものではないと言ひ、自分も乱れ心で娘と対話し、娘に「難波の大寺の神子みこを呼び寄せて、冥途の事ども口寄せで聞き給へ」と言うのと、娘は「有難き教へぞ」と喜んだ。神子に娘の様子を密かに言い含めた上で、神子は「梓に懸けて」母を呼び出した。「神子わめき出だしぐ」、「親の恩愛思ふには、夫の心に従ひ、普段は世を大事に思ひ、命日には精進、香花摘みて弔ふべき」を、母を慕つて嘆くばかりだから、「涙の熱湯の玉降りて、身にかかりての苦しみ」である。私は成仏して「九品の蓮台に座して憂き世を忘れ」ていたのに呼び戻され、往生の障りになった。「今よりは子にあらず親にてなし」と立腹したので、娘は「母を恨み心になり」正氣に戻つた。そこで祝儀を取り急ぎ、この家はいよいよ繁盛した。

「かかる例、唐土にも長明子が養生の才知に見えたり」。

素材…荒木村重・横笛・『歌占』

本話①に、「摂津の国伊丹の城主に仕へて、郷方の支配して」とある。先に触れたように、広嶋進氏は伊丹城主に荒木村重

をあてていると指摘している。頭注にはこれ以上の説明はないが、これは単に「伊丹の城主」ということだけではなく、本話の全体的な展開からの推定であろう。②の「抜け道」をこしらえて船で通うなどのことを踏まえてのことだと思う。なるほど村重は織田信長に伊丹城を与えられ「伊丹城主」となった。しかし、本話の登場人物は「殿にも御ためよく」郷方を支配する代官で、その代官に荒木村重が嵌め込まれているのである。「伊丹城主」は信長、郷方を支配する代官に村重が嵌め込まれているとみることができ、村重は郷方の代官、一郷侍から伊丹城主となるのであり、両者に村重が嵌め込まれているとみることができる。「伊丹城主」は、村重を想起させるシグナルとみるべきなのである。

①の素材は、信長から伊丹城を与えられ、摂津一国の支配を任されていた村重の、信長に仕える武将としての成功の事跡である。村重の栄えていた時期の事跡は、次のようなものである。

村重は池田勝正の家臣であったが、三好三人衆の調略に乗り、池田知正と共に三好家に寝返り池田家を掌握する。元龜二年（一五七二）白井河原の戦いで勝利し、三好家から織田家に移る。天正元年（一五七三）茨木城主、同年、若江城の戦いで功を挙げ、摂津一国を任された。天正二年、伊丹城を落とし伊丹城主となり、村重は有岡城（伊丹城の改称）を中心とした新たな支配体制を構築した。以後も信長に従い、天正四年石山合戦、天正五年紀州雑賀の一向一揆、天正六年秀吉と共に播磨経略など、各地を転戦し武功を挙げた。

②の素材としては、(1)『源平盛衰記』巻三十九「時頼横笛の事」、(2)村重の謀反、妻「だし」をはじめ一族の処刑の二つが取り上げられている。

(1)横笛について、『源平盛衰記』「時頼横笛の事」を素材とすることは、本文に明示されている。本文と語句も一致している。そのあらずは、次のようなものである。^(注5)

高倉院御位の時、建礼門院に美しい「半物^{はしたもの}」、横笛・刈萱が仕えていた。横笛は「本は神崎の遊君、長者の娘なり。大方も無双の能者」であった。小松内府に仕える斎藤時頼は、その横笛と「松蘿^{しょうら}の契色深く」相愛の間柄であったが、父

茂頼の諫めにあい、悩んだ末に十八歳で出家して嵯峨の法輪寺に入り、滝口入道となった。横笛は法輪寺を尋ねあて、滝口の読経の声を聞き名乗りをあげるが、滝口は道心が弱るのを恐れて人違いだと会わず、隠れてしまう。横笛は泣く泣く都へ帰ろうとするが、大井川の早瀬、御幸の橋の本に行って上衣を柳の枝に脱ぎ掛け、「思ふ事ども書き付けて、同じ枝に結び置き、歳十七と申すに河の水くづとなりにけり」。

西鶴は、本文に「『盛衰記』に見えたり」と明示している。『源平盛衰記』は、『平家物語』の異本であるが、高野本や寛一本などの『平家物語』巻十「横笛」の逸話とは異なる。西鶴は、その違いを強調しているのであろう。『平家物語』の横笛の逸話は、次のようなものである。^(注7)

斎藤滝口時頼は、建礼門院の雑仕横笛を愛したが、横笛の身分が低いという父の諫めにあい、十九歳で出家して嵯峨の往生院に入った。横笛は伝え聞いて往生院を訪ねたが、滝口は道心が弱るのを怖れて会わず、心が動揺することを危惧して高野山の清浄心院に籠った。滝口は横笛が出家してことを伝え聞き、一首を送る。

そもまではうらみしかどもあづさ弓まことの道に在るぞうれしき

横笛の返歌、

そるとてもなにかうらみむあづさ弓ひきとどむべきところならねば

横笛は、「その思の^{おもひ}つもりにや、奈良の法花寺にありけるが、いくほどもなくて、遂にはかなくなりけり」。

両者の大きな相違は、嵯峨からの帰途、横笛が入水するところである。横笛は執心の果てに入水するという一方で、本話に取り込まれているのである。またそれだけではなく、横笛が滝口入道に取り残され見捨てられたことを強調している。『盛衰記』の横笛説話の方が鮮烈な印象を与えるものであろう。

梓弓の歌の贈答は『源平盛衰記』にはみえないが、仲沙織氏は、この横笛の梓弓の逸話が③の素材にも関連するとしてい^(注7)る。

後半部では狂乱した娘を癒やすために梓神子が母親の霊の口寄せを行う。…ここで注目されるのは出家した滝口と横笛による贈答歌にいずれも「梓弓」が詠み込まれていることである。

果たしてこの梓弓の贈答歌が③の素材と関連しているのだろうか。仲氏は、横笛説話は周知のもので、当時の読者は「梓弓」の贈答を連想するのは当然だろうという。しかし、西鶴があえて『盛衰記』に見えたり」と明示したのは、横笛の入手のみを取り上げるということで、『平家物語』にみえる、滝口と横笛の未練な梓弓の贈答歌は取り上げないということであろう。滝口は、村重とは相手に対する思いが異なる。滝口は自らの意志で出家し、自己の苦境を打開しようと逃避したに過ぎない。横笛の将来のことも、その死も考えることなく、横笛を見捨てたのである。村重は妻である「だし」を見捨てたのではなく、戦況を打開し「だし」を救おうとしたのであるが、結果的にどうにもならず、見捨てることになった。何よりも贈答歌の梓弓は枕詞で、占いとは無関係である。また後述するように、梓弓は③の素材として謡曲『歌占』を想起させるものである。

(2)は、①の素材に連続する荒木村重の謀反とその妻「だし」の逸話である。

荒木村重は、天正六年十月ごろ、信長に異心をもつという噂が流れ、弁明のために安土へ行くことを中川清秀等に止められ、叛逆を決意したと言われる。十一月足利義昭・本願寺・毛利氏に通じ、有岡城に籠城して徹底抗戦したが、天正七年九月、戦況を打開するために単身で有岡城を脱出し、尼崎城へ移る。その後、毛利氏に亡命した。有岡城は十一月に陥落、女房衆、村重一族と重臣の家族は処刑された。

村重は戦況を打開するために脱出したのであるが、本願寺や毛利の援軍は得られず、有岡城は落城することになる。有岡城に残された人々について、『立入左京亮入道隆佐記』は次のように伝えている。^(注)

…れき／＼の者共。男女子共四百六十計。家を二間つくり。二間之家へ追こみ。裏表よりやきくさをこみ。火懸やきころさるゝ。其刻尼崎表に久左衛門女房をはしめ。九十七本はたものをあげられ候。こと／＼くうつくしきいしやうきせられ。めもあてられぬ事無申計候。又京都へは荒木つのかみか女房。城の大手のだしにをき申女房にて候故。名をはだし殿と申候。

一段美人にて。い名はいまやうきひと名つけ申候。一條より六條河原へ。車十二りやうにてわたされ候。(中略)津国にて。せいはいやきうちはた物。京にての車さき。上下卅六人。以上六百人計之御成敗候か。

いまやうきひ大坂にて川なう左衛門尉と申者むすめなりおと、い三人
みかくへき心の月のくもらぬは光と共に西へこそ行

荒木女房ちよほ

たし殿廿四

晴元の御内に田井源介孫共也源介孫か此内に五人有男女共に
のこし置そのみとり子の心こそすて置し身のさはりともなれ

ちよほ

たし殿

書置も袖やぬれけんもしほ草き、はてし身のかたみともなれ

ちよほ

たし殿

『信長公記』にも荒木一族の処刑や辞世など、より詳細な記事がみえる。「だし」の辞世は、次の四首である。(注)

きゆる身はおしむべきにもなき物を母のおもひぞさはりとはなる

残しをくそのみどり子の心こそおもひやられてかなしかりけり

木末よりあだにちりにし桜花さかりもなくてあらしこそふけ

みかくべき心の月のくもらねばひかりとともににしへこそ行け

一方、荒木村重は天正八年(一五八〇)、尼崎城より毛利に落ちるが再起はならず、剃髪して道叢と称する。天正十一年、

信長の死後、羽柴秀吉は村重を呼び寄せて茶の湯で仕えるように命じる。道薫を道薫と改め、利休の高弟七哲の一人といわれる。天正十四年、泉州堺で死亡、享年五十二歳。戒名は「秋英宗薫居士」であった。

本章には、荒木村重の謀反とその脱出によってもたらされた二つが素材として取り込まれていると考えられる。

(ア) 地獄ともいべき処刑の場が現出されたこと。

(イ) 「だし」の辞世に詠まれた「みどり子」が残されたこと。

この二つは③に関連している。

③の素材は、謡曲『歌占』である。しかし、仲氏は、謡曲『角田川』(隅田川)を素材として指摘している。^(注1)

…後半部では母親を慕うあまりに狂乱した娘のために、梓神子による口寄せを用いての母親の霊との再会が行われる。この〈親子〉、〈狂乱する女〉、〈霊との再会〉という要素から想起される文学作品がある。それは、謡曲「角田川」である。

…巻四の一には前半部にも《渡し船》《岸の柳》と、謡曲「角田川」を連想させる単語が用いられている。このように巻四の一に利用されている滝口横笛説話と謡曲「角田川」はいずれも愛する者に対する執心が深い女性の物語であることが注目される。

梓神子による口寄せは、滝口横笛の梓弓の贈答歌によるものでないことは、すでに述べた。〈親子〉、〈狂乱する女〉、〈霊との再会〉は、いかにも本話と共通するのように見えるが、少なくとも〈親子〉は本話では母親と娘で、娘が母親を慕うのである。〈狂乱する女〉は母親ではなく残された娘である。〈霊との再会〉は、謡曲『角田川』では一瞬現れた幻と「あれはわが子か」「母にてましますか」と手を取りかわし、すぐに消えていく。再会とはいえないものである。そのため仲氏は、元禄初年頃に上演された古浄瑠璃『角田川』にみえる梅若丸と母親の問答を例証としてあげている。前半部の《渡し船》は、川船・通ひ船・船とあるものを指すのであろう。《岸の柳》は「岸の柳のいつなり」と遊女のなびくことを指すものである。いずれも西鶴が『角田川』を想起させるシグナルとしたとはいえないものである。本話の母親を慕う娘を、息子を慕う母親という

ように、親子の立場を逆転させているとするのであれば、その必然性、西鶴の作意を論じる必要がある。

② (ア) (イ) について③に関連するとしたのは、③の母親には、村重の妻で一族三十六人とともに六条河原で処刑され地獄に落とされたような「だし」が嵌め込まれ、娘には、残された「みどり子」が嵌め込まれていると考えられるからである。残された子は二歳のみどり子で、乳母に託され城を脱出し、生き延びたとされている。その子が有名な浮世絵師岩佐又兵衛であると伝えるが、西鶴はそのような「だし」と男児の話を踏まえながら、女兒が母を慕うというように設定しているのである。そしてそれは、重層世界においては静御前だと気付かせるためのシグナルなのである。静御前は義経を慕う。そのように考えると、素材は男児が残され、父親を慕う話ということになる。男児が父親を慕うストーリーの謡曲は、『弱法師』『木賊』などいくつかあるが、その父親が地獄に関わるのは『歌占』である。

本話③で、「これより狂乱して」、「難波の大寺の神子呼び寄せて、冥途の事ども口寄せて聞き給へ」「梓に懸けて呼び出だす」「涙の熱湯の玉降りて、身にかかりての苦しみ」と描かれる。これらのことが含まれているのは、謡曲『歌占』である。(注1)

加賀国白山の麓の里人が、「この程いづくの者とも知らぬ男神子の来り候が。小弓に短冊をつけ歌占を引き候が」、よく当るといので、親に別れた小児を連れて占ってもらいに行く。神子は「占問はせ給へや歌占問はせ給へや…所は伊勢の神子なりと難波の事も問ひ給へ、人心。引けば引かるる梓弓。…」という。里人に、どこの何者で、若く見えるのに何ゆえ白髪なのか問われ、「伊勢の国二見の浦の神職なるが。われ一見の為に国々を廻る。ある時俄かに頓死す。又三日と申すによみがへる。それよりかやうに白髪となりて候。これも神の御咎めと存じ候」と答える。まずその里人の父親の病氣については蘇生すると占い、次にその小児の歌占を見る。尋ねる父には既に逢っているはずだがと不思議に思い、小児の素性を聞くと、「伊勢の国」「二見の浦」「二見の太夫渡会の何某」の子幸菊丸と名乗る。白髪であった故に「面忘れ」したか、自分こそ父であると明かす。里人は親子の再会を祝し、「又人の申され候は。地獄の有様を曲舞に作りて御謡ひある由承り及びて候」と、神子に地獄の曲舞を所望する。神子は「この一曲を狂言すれば。神気が添うて現なくなり候へども」

と言いながら、「面々名残の一曲に。現なき有様見せ申さん」と舞う。斬鎚地獄、劍樹地獄、石割地獄、火盆地獄を演じる。「飢ゑては。鉄丸を呑み、渴しては。銅汁を飲むとかや」「身より出だせる科なれば。心の鬼の身を責めて。かやうに苦をば受くるなり」と神気がついて舞い納めた。やがて狂乱から覚めて、親子うち連れて帰国した。

『歌占』の「地獄の曲舞」は『太平記』巻二十「結城入道墮地獄事」から出たもので、男神子は、結城入道が伊勢国で死んで阿鼻地獄に堕ちたことを踏まえたものかという。^(注12) 結城入道は新田義貞方に加担して足利高氏方と戦うが敗れる。奥州での再起を期して、伊勢から船路で戻ろうとするが、天竜灘で難破して伊勢に漂着し、病死する。本話の「船路の難儀」と共通しているのである。結城入道の難破のこと、地獄譚、さらにその死を伝え聞いた息子宫内権少輔が父を供養するなどのこともあり、それらを含めて『歌占』が素材とされているのであろう。

③は「かかる例、唐土にも長明子が養生の才知に見えたり」と結ばれる。唐土の長明子と解され、長明子および養生の才知は不詳とされているが、西鶴がそのように指摘困難な「長明子」なる人物とその逸話を用いているとするのは不可解である。ここは文章をあえて捻じれさせているのであり、西鶴の遊び、謎かけのようなものではないだろうか。「長明子」は、鴨長明を指しているのであろう。「唐土に」「養生の才知」はあるが、「本朝にも」「長明子」による「養生の才知」があるというのである。長明の才知は執心についての才知で、「執心」について述べた『方丈記』の跋文を指すのであろう。^(注13)

そもそも一期の月影かたぶきて、余算山の端に近し。たちまちに三途の闇に向はんとす。何のわざをかかこたむとする。仏の教へ給ふおもむきは、事にふれて執心なかれとなり。今、草庵を愛するも、閑寂に著するも、さばかりなるべし。いかなが要なき楽しみを述べて、あたらし時を過さむ。静かなる暁、このことわりを思ひつづけて、みづから心に問ひてはいく、世を遁れて山林に交るは、心をさめて道を行はむとなり、しかるを汝、すがたは聖人にて、心は濁りに染めり、栖はすなはち浄名居士の跡をけがせりといへども、たもつところはわづかに周梨槃特が行にだに及ばず。もしこれ貧賤の報のみづから悩ますか、はたまた妄心のいたりて狂せるか。そのとき心さらに答ふる事なし。ただかたはらに舌根をやとひて、

不請阿弥陀仏両三遍申してやみぬ。

また、「かかる例、唐土にも長明子が養生の才知に見えたり」は本話の末尾に付されたもので、次章巻四の二の直前にある。詳しくは次稿に譲るが、巻四の二は、その重層世界として源実朝の逸話を重ねている。その実朝のことを想起させるシグナルとして、「長明子」「養生の才知」がはめこまれているのである。鴨長明について、『吾妻鏡』建暦元年（一二二一）十月十三日の項に、次のようにある。^{（注4）}

鴨社の氏人菊大夫長明入道（法名龍胤）雅經朝臣の挙によつて、この間下向す。将軍家に謁したてまつること度々におよぶと云々。さらに実朝とは榮西禪師も関わりがある。『吾妻鏡』建保二年（一二二四）二月四日の項に、次のようにある。

将軍家いささか御病惱。諸人奔走す。…ここに葉上僧正御加事に候ずるところ、この事を聞き、良薬と称して、本寺より茶一盞を召し進ず。しかうして一卷の書を相副へ、これを献ぜしむ。茶徳を誉むところの書なり。

葉上僧正（榮西禪師のこと）は、実朝の病悩を癒すために茶を勧め、一卷の書（『喫茶養生記』のこと）を献じている。「養生の才知」には榮西の『喫茶養生記』をも踏まえているのであろう。

解釈…執心を生じさせることを戒める話

仲氏は前掲の論考で、巻四の一は「執心に対処する物語」としてしている。横笛や難産の末に残された娘、さらには謡曲『角田川』の母親の執心に、どのようにに対処したかが描かれた物語としていようである。しかし、横笛や娘の執心をどのように収めたかという程度の問題ではなく、そのような執心が生じる原因を抉り出し、執心によって生じた不孝、残酷な出来事を描くことによって、執心を生じさせたことを戒める物語なのである。同時に、そのことによって減じていった武将の逸話を重ねているのである。重要な登場人物は、素材の荒木村重や本話の代官、重層世界の源義経など、男（武士）の側にある。目録副

題「武士は心の海に油断せぬ事」は、そのような武士が自分自身の心に執心を生じさせたこと、またそのために相手にも執心を生じさせたことを、「油断」としているのである。その原因は「美女のもてあそび」「私ありし」などの、好色の問題であることはいうまでもない。

そのようなあり方を、素材AからC、本話のあらすじ①から③をA iiからC iiとして対比して、検証する。

A 荒木村重は多くの武功をあげ、信長の代官として摂津一国を任されて治めていた。今楊貴妃といわれる天下一の美女「だし」を寵愛していた。

A ii 伊丹城主の代官は、殿のため見事に一国を治めていた。すべてに過ぎたことがなかったが、ただひとつ「美女のもてあそび」がやまない。

B (1) 横笛は嵯峨の法輪寺に滝口を訪ねるが、逢ってもらえずに見捨てられる。帰途、大井川で入水する。

B (2) 村重は有岡城を脱出し、尼崎城へ移り戦況の打開をはかろうとする。「だし」は村重に置き去りにされ、六条河原で一族三十六人と共に処刑されるが、「だし」の子は乳母に連れられて脱出していた。村重は僧となり、道糞と称する。

B ii 代官は抜け道をつくり、神崎の里に通う。妻の執心から妻を同道する。ある時妻は遊里へ向かう船中で娘を産み、難産のため死亡する。代官は「これは片寄せ」「宿にてかくなりゆく首尾」にする。

C 幸菊丸は、男神子の梓弓の歌占で行方の知れなかった父を尋ねあてて。神子が父であった。地獄の曲舞を所望された父は、神罰を受けて頓死し、自分が見てきた地獄の様子を舞い、狂乱する。

C ii 母の死の原因を知った娘は狂乱して、母を恋慕う。梓神子の口寄せで母の霊に再会する。母は地獄の苦しみを訴え、菩提を弔うように命じる。娘は正気にもどり、祝言をあげ、家は栄える。

A 荒木村重は、信長の武将として多くの武功をあげ、一国を任されていた。有岡城を中心として摂津一国を見事に統治し、さらに武功をあげて出世していく立場にあったはずである。その村重が謀反を起こしたのは何故だろうか。それについてはさ

まざまに論じられているが、重要なのは、西鶴がどのように考えていたのかである。

西鶴は、村重をA iiでは「良い加減といふ考へあるべし」「過ぐる」ことのない代官として描きながら、①「美女のもてあそびやむ事なく」、②「執心深き女」に関わり、③「私ありしゆ多なり」と、その行為を批判している。行動の根底に女性が絡むとしているのであろう。村重は「だし」を寵愛していたに違いない。その今楊貴妃と称せられる美女「だし」は、前掲の『立入左京亮入道隆佐記』には、「大坂にて川なう左衛門尉と申者むすめなり」と記されている。石山本願寺に仕えた川那部氏の娘とされている。村重の行動には、戦国武将としての権謀術数、まざまな理由があつたに違いないが、西鶴はそれを承知の上で、女性に関わるところに、村重の行動の根底にある動機をみようとしていたのではないだろうか。

B iiの代官の妻同行の遊里通いについて、広嶋氏は次のように注記している。^(注15)

伊丹の城主荒木村重は、信長に攻められ、有岡城（伊丹城）に籠城するが、妻子や臣下を見捨てて、尼崎城へ逃げた（信長公記十二など）。逃亡手段は猪名川の船であつたと推定される。本章で代官が、妻と共に伊丹から神崎へと船で通う行為は、右の村重の行動と対照的な設定を意図したものであろう。

本話B iiの代官の行動を、村重の行動と対照的な設定にした西鶴の意図は何なのだろうか。ただ面白さをねらったものなのか。そのような設定の異常さと、その作意について論じなければ、単なる対比をしたに過ぎない。

B (1)横笛は法輪寺を尋ね、滝口について行こうとするが、それを拒否されて入水する。ある意味で処刑されたのと同じである。B (2)の「だし」はついて行こうとしたわけではない。それにもかかわらずB iiでは、代官の妻は夫に同行して遊里に通う。この素材にはなかった「同行する」という要素は、新しく付加されたものである。実は、横笛も「だし」も心では同行しているのである。滝口は別であるが、村重は「だし」を連れて脱出している心持ちではないだろうか。「だし」ゆかりの石山本願寺を介して、戦況の打開を計ろうとして脱出したのである。それは城に残した「だし」たちのためでもある。心の中での同行、B iiの船路での難産と死という難儀も、村重の心の中に思う予想外の残酷な処刑という難儀なのであろう。この「船路の難儀」

「同行」は、重層世界へのシグナルでもあるが、それについては後述する。

村重は、自分の脱出が「だし」をはじめとする六百人にも及ぶ残酷な地獄ともいえる処刑を招くとは、まったく予想していなかったのではないだろうか。『立入左京亮入道隆佐記』には、「かやうのおそろしき御せいはいは。仏之御代より此方のはしめ也。源平の合戦にも。五人三人のせいはい。腹をきり申なと、こそ承及候に」と前代未聞であるとする。それを予想しなかったことは、やはり「油断」にあたるのだろうか。信長にとって村重の謀反は、毛利、石山本願寺、摂津の諸大名が連携することを意味し、覇権の行方を左右する重大なものであっただろう。そのために残忍な処刑を命じたということであり、それだけ信長の怒りが大きかったことが示されている。村重は、そのような残酷な処刑がなされるとは予想しなかったからこそ、「だし」たちを残したのである。信長側に立つ『信長公記』に、村重が妻子や臣下を見捨てて尼崎城へ逃げたと記され、卑怯者の代名詞のごとく扱われているのは当然であるが、その後の実際の村重のあり方とは齟齬がある。村重は出家し、自らを「道糞」と称したが、そこには自己の行為に対する自嘲的ともいえる悔恨が認められる。

Bには「だし」の辞世にみられた「母」「みどり子」のことがみえる。村重は男子が殺されることを予想し早めに脱出させたのであり、妻や女は処刑されるとは思っていなかったであろう。それはともかく、この残された子と「道糞」は、C、C ii へつながる。

Cの『歌占』で幸菊丸は父を訪ねる。父は神にことわりもなく出奔したため地獄の憂き目にあい、白髪となっている。C ii で娘は姥によつて真実を知らされる。母は病死ではなく、船路で難産の末、自分を産んで死んでしまったと聞かされて狂乱する。自分を産むために死んだと知って母を慕うことになるのだが、狂乱するまでになるのはいささか不可解な設定である。おそらく単なる難産といったものでなく、素材Bにみる「だし」たちの、地獄ともいふべき処刑を知ったことを連想させるためであろう。父親は「これに気を懲らし、程なく相果て、外に男子もなくして、この家絶えて、自然とその名の廃る事、遊興に好み入り、武士の私ありしゆゑなり」となる。ここにも素材Bにみる村重の出家、道糞と称したことが嵌め込まれているので

あろう。「だし」たちの地獄の処刑は、娘には「宿にてかくなりゆく首尾」としていたが、その真実を知られて悔恨に責められ、自己を道の糞とまで貶める。村重は出家したことにより、武将としての家は途絶えてしまった。それはCの男神子の姿でもある。伊勢の神職であった男神子は、神の許しなく出奔して、頓死し地獄を見る。白髪となって、今は男神子として梓弓の歌占をして廻国している。Bの村重の脱出から出家、さらに茶人として秀吉に仕えるまでのあり方に共通する。

Cで重要なのは、「身より出だせる科なれば。心の鬼の身を責めて。かやうに苦をば受くるなり」と、神罰であるとしていることであろう。登場人物の行為は神罰を受けるほどのものだといふのである。C iiで、代官も「遊興に好み入り、武士の私ありしゆゑなり」とされている。その結果、C、C iiでは、「狂乱」「地獄」が取り上げられるのである。C iiの狂乱した母親の霊は、「朝暮嘆く涙の熱湯の玉降りて、身にかかりての苦しみ」と、地獄の苦しみを受けているので、菩提を弔えと命じるのである。娘は母親を「恨み心になり」とあるが、母親が自分たちは神罰を受けたものであり、娘には神罰を受けない正しいあり方を教訓したということなのであろう。娘が父母のあり方は「私ありし」であつたと知って、恨み心になつたといふのである。

C iiの末尾に付された長明子の養生の才知は、娘が「私ありし」執心から醒めたことをいうものであろう。「物には良い加減といふ考へあるべし」と、「過ぐる」ことを戒めるものである。

重層世界…源義経の都落ちと静御前

第一層の素材を駆使して創作された第二層である本話は、その換骨脱胎の巧みさが見られる実に面白い話である。『新可笑記』の各章は、素材と本話の関わりを見抜いてまず「一つの笑い」（虚の笑い）を楽しむところにある。さらにその上に「もう一つの笑い」（実の笑い）が重ねられていることを見抜き、楽しめるように三層構造をなしている。本章の場合、素材に付加さ

れた要素、船での遊里通いに妻を「同行」という異常さに注目することが重要なのであった。素材の横笛や「だし」が心で同行しているとして、本話で実際に妻を同行させたのは、重層世界を想起させるためのシグナルであった。

本話B iiの高倉院、建礼門院、盛衰記などの語句は、源義経を想起させるシグナルである。義経を想起すれば、船での遊里通いに妻を同行することには、義経の西国への都落ちが重ねられていることに気付く。

『吾妻鏡』 文治元年（一一八五）十一月六日の項に、次のようにある。^(注16)

行家・義経、大物の浜において乗船の刻、疾風にはかに起りて、逆浪船を覆すの間、慮外に渡海の儀を止め、伴類分散して、相従ふの輩わづかに四人、いはゆる伊豆右衛門尉。堀弥太郎・武蔵坊弁慶ならびに妾女^侍一人なり。

ここでは義経が伴った妻妾は静御前だけのように記されている。しかし『義経記』には、次のような記述がみられる。^(注17)

〔巻第四 義経都落の事〕 その中にも御志深かりし平大納言の御娘、久我大臣殿の姫君、唐橋大納言、鳥飼中納言の御娘、この人々は皆さすがに優なる御事にてぞおはしける。その外静などをはじめとして、白拍子五人、惣じて十一人、一つ船にぞ乗り給へる。

〔巻第四 住吉大物二か所合戦の事〕 平大納言の姫君は、駿河次郎承りて送り奉る。久我大臣殿の姫君をば、喜三太が送り奉る。その余の人々は、縁々に付けてぞ送り給ひける。

中にも静をばなほも志深くや思はれけん、具し給ひて、大物の浦をば発ち、渡辺に着き給ひて、…文治元年十二月十四日の曙に、…吉野の山にぞ籠られける。

〔巻第六 忠信都へ忍び上る事〕 判官都を出で給ひし時も、（忠信を慕う女が）摂津の国川尻まで慕ひて、いかならん舟の内、浪の上までと慕ひしかども、大夫判官北の御方数多一つ舟に乗せ奉り給ふだに、あはれ詮かたなき事かなと思ふに、（忠信は女を振り捨て独り四国へ下ることにする。）

〔巻第六 静鎌倉へ下る事〕 さても大夫判官四国へ赴き給ひし時、六人の女房達、白拍子五人、惣じて十一人の中に、殊に

御志深かりしは、北白川の磯禪師が娘、静といふ白拍子、吉野の奥まで具せられたりけるが、都へ帰され奉りて、母の禪師が許にぞ候ひける。

史実としては、義経の正妻は河越重頼の娘で郷御前と呼ばれていたが、『義経記』では、架空の人物である久我大臣殿の姫君が正妻である。「判官北国落の事」（巻第七）でも従い、何度も「北の方」の名が出ている。静だけではなく正妻も、大物浦での難破の時にも同行していたわけである。史実としての正妻である郷御前は『義経記』では同行していないが、この点について、細川涼一氏は『吾妻鏡』の記事は北条氏の立場からするもので、比企氏につながる河越重頼の娘である義経の正室郷御前についての記事は極力抑えられ、わずか三か所（元暦元年九月十四日、義経との婚姻・文治三年二月十日、奥州下向・文治五年閏四月三十日、平泉における死去）しか記載していないと指摘している。その上で、郷御前は大物浦へは同行していたか不明で、京都に潜伏していて、奥州への逃避行には従ったとして^(注16)いる。

史実としてはそのようなことであつたであろうが、西鶴は『義経記』などの伝承から、義経は大物浦からの西国落ちには、静御前だけではなく、正妻も同行していると考えていたのであろう。章題「船路の難儀」は、本話の船中での難産と死を示すように見えるが、実は義経が摂津大物浦から船出し、暴風のために難破して西国での再起を果たせなかったことを指しているのである。

本章の重層世界は、義経の逸話であることは明らかであろう。義経の逸話を、A iiiからC iiiとして対比してみる。

A iii 寿永二年（一一八三）冬、頼朝の命を受けて木曾義仲を牽制するために出陣してから、数々の武功をあげる栄光の日々。
B iii 頼朝に謀反の疑いを懸けられ、西国を目指して都落ちし、難破の難儀に逢い、吉野へ逃れて、静御前と別れる。奥州平泉まで逃亡したが、最後は藤原泰衡に討たれる。

C iii (1) 静御前は吉野で捕らえられ、鎌倉に送られる。頼朝の命で鶴岡八幡宮社前で舞う。産まれた子が男子だったので由比ヶ浜に捨てられる。

C iii(2) 静御前は吉野で義経を慕って狂乱して舞う。

A iiiの義経は、Aの村重、A iiの郷方の代官と同様に、優れた武将としての栄光の日々を手に入れていたことができる。治承四年（一一八〇）、兄源頼朝が平家打倒の兵を挙げると、それに馳せ参じ、寿永二年冬に出陣してから翌元暦元年（一一八四）正月、義仲を討つ。次いで二月、勢力を回復し福原まで迫ってきた平家を討つ。さらに文治元年（一一八五）二月、屋島の平家の拠点を急襲して敗走させる。三月には壇ノ浦で平家を滅亡させるのである。ところが、十一月には、謀反の疑いをかけられ、大物浦から西国へ向かうのである。

義経の栄光の日々は、非常に短かった。西鶴は、義経が謀反を企てたとされたことについて、村重や郷方の代官と同じように、美女への執心があつたからだとしているのであろう。そのためにB iiiで、あえて大物浦からの船出に静御前と郷御前を同行させ、吉野での静御前との別離を重ねているのである。

B iii義経の謀反は、頼朝の許可を得ることなく官位を受けたことや、平家との戦いにおける独断専行によって怒りをかつたと、梶原景時の讒言があつたなどさまざまに論じられる。しかし西鶴にとっては、頼朝と対立し朝敵とされ西国へ向けて都落ちしたこと、摂津大物浦から船出したが暴風のために難破し、主従散り散りとなって摂津に押し戻されたという事実が興味の中心であつたのだろう。義経は吉野に身を隠したが、ここで愛妾静御前が捕らえられた。逃れた義経は藤原秀衡を頼り、正室の郷御前と四歳の女子を伴って奥州へ向かい、平泉に身を寄せる。秀衡の死後、文治三年（一一八七）藤原泰衡によって衣川館を襲撃され、義経は正妻の郷御前と四歳の女子を殺害した後、自害したのである。B iiの代官は妻を失い自分も死に、家が絶える。B iiとB iiiとはほぼ似たような筋立てになっている。ただ、素材B(2)では「だし」が男子を残したが、本話B iiでは女の子が残されることに変更されている。それはB iiiの静御前を、その女の子に重ねるためのものであつた。素材B(1)で横笛の母親である神崎の長者を取り上げていたが、神崎と大物は、近接した場所で、船出のための港としての意味を持たせただけでなく、遊里として、白拍子であつた静御前を想起させるシグナルでもあつたのである。

C iii(1) 静御前は鎌倉へ護送され、文治二年（一一八六）、頼朝の命を受け鶴岡八幡宮で舞う。『吾妻鏡』文治二年四月八日の項に、次のようにみえる。^(注19)

（静女は以前に何度も辞退したが、廻廊に召し出される。御台所政子の懇請によるものである。静女はなおも固辞したが、「貴命再三に及ぶ」。）

静まづ歌を吟じ出して云はく、

よし野山みねのしら雪ふみ分けていりにし人のあとぞこひしき

次に別物の曲を歌ふの後、また和歌を吟じて云はく、

しつやしつしつのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな

まことにこれ社壇の壮観、梁塵もほとほと動きつべし。上下皆興感を催す。

（頼朝が、八幡宮の宝前では関東の万歳を祝うべきなのに、反逆の義経を慕い別れの曲を歌うとは奇怪だと憤ると、政子は頼朝の苦難の時の自分の想いを引き合いに出し、女として私も同じようにするだろうととりなし、「賞翫したまふべしと云々」。）

静御前が義経を慕って舞うというのは、有名な史実である。頼朝の前で義経を慕って舞うというのは狂乱に近いが、一人舞であり霊が現れるわけではない。素材Cや本話C iiでの霊の出現に重ねられているのは、謡曲『二人静』である。本話C iiに見えた、思慮深い人が娘と同じ狂乱の姿となるどころ、また梓神子が「命日には精進、香花摘みて弔ふべきを」というところなどは、謡曲『二人静』を想起させる。

C iii(2)は、鶴岡八幡宮の社前の静御前の舞に、『二人静』の静御前の霊の舞が重ねられている。『二人静』の内容は、次のようなものである。^(注20)

吉野勝手明神の正月七日の神事のために乙女が若菜を摘んでいると、一人の女性が現れ、自分を供養してくれるよう神

職に頼んで欲しいという。名前を告げず、疑われたら取り憑いて名前を明かすと言い消える。乙女は神職に報告したが、疑いの言葉を口にしたため狂乱状態になった。神職が憑き物に名前を尋ねると、静御前であると答える。神職は弔うことの条件に、静御前の霊に舞を所望する。かつて静御前が奉納した衣装を身につけて乙女が舞い始めると、いつのまにか静御前の霊も同じ衣装で現れ、一人の女が二人になって舞うのだった。

西鶴は、Cの村重は、出家し自らを「道糞」と称して悔恨しているとみていた。『歌占』にみるように、自らの科を自覚し、神の許しを乞うていたのである。C iiでは、母親の霊に菩提を弔えと言わせている。そのような神仏への供養を願うという筋立てを受けて、C iiiでも『二人静』を重ねて、静御前に供養を願わせたのであろうか。

本章の主題は、武将は、正しく国を治め、武士の本分をまっとうすべきなのに、それ以外の、「美女のもてあそび」に執心し、そのあるべき姿を踏み外して、滅びてしまった武将の「過ぎた」あり方を戒めるものである。女性への愛ゆえにどうしても「良い加減といふ考へ」になりえずに滅びてしまった武将として義経を重ね、また素材としての村重の滅びを取り上げているが、西鶴は滅びの武将たちを徹底的に批判しているようにも見えない。本章は、そんな武将たちへの挽歌ともいう話になっているのである。

おわりに…批評の立場の相違

金井寅之助氏は、本章を酷評している。^(注2)

これも中国種の話であるが、娘の発狂を神子を使って癒すのが主要説話で、愀気深い妻の話を組み合わせ、更に章首に『可笑記』らしくするために、郷方の武士の心得の種々を加へたのである。話に統一がなく、文章また粗雑、甚だ読みづらいものである。…話の内容は興趣もなく意義も乏しい。

『新可笑記』は、西鶴が知的な謎解きを仕掛けた三重構造を知ること、面白味がわかる作品である。第一層素材や第三層重層世界を示すさまざまなシグナルが嵌め込まれているが、それを読み解くことで、西鶴の謎かけに対応することができるのである。西鶴が用いる素材、また重層世界は周知のものが多く、西鶴のシグナルによって容易に知ることができるものである。そのようなことを前提としないで、第二層の本話のみを読むと、かなり難しい解釈を迫られる。金井氏は「中国種の話である」としながら、具体的な指摘もなく、娘の発狂の癒しが主要説話で、郷方の武士とその妻が組み合わされていると酷評する。しかし、①「美女のもてあそび」から、②「執心深き女」、③「母の事暫時も言ひやまず」へと重ねられた語句をたどっていくと、本話にあってもそれなりに、代官の、妻の、娘のそれぞれの「執心」を戒める話であることが理解できるのである。第二層の本話は「一つの笑い」(虚)に十分こたえることができ、決して駄作というものではない。ただ西鶴が、本話である第二層のみを創作の目的とはせず、第三層の重層世界「もう一つの笑い」(実)を重ねることを目的としていることから、妻同伴の遊里通い、娘と神子の二人の狂乱など、異常さを強調するところがみられる。しかし本話の情趣を損なってしまうというほどの破綻ではなく、そこに抱く違和感によって重層世界に到達しうるように仕組まれたものなのである。

また、篠原進氏は、本話を「凡庸な一話であるが、真に読むべきは本話の冒頭部分にある」として、〈毒〉、すなわち武家体制への批判精神を読み取ろうとする。^(注2) あらすじ①にみられる、年貢徴収に関連した庄屋や年寄の賄賂、代官の汚職などの記述を、殊更に取り上げて、西鶴の秘められた作意があるとしているのである。この①は素材の村重の優れた統治を際立たせるためであり、重層世界の義経の栄光の日々を重ねるためのものである。本話①から〈毒〉すなわち武家体制への批判精神を読むのであるのは、ある意味で重層世界を読もうとすることにつながるが、①の本来の主旨ではないものを部分的に抜き出して論じることには賛同しがたい。『新可笑記』の各章にそのような武家体制への批判精神が重ねられているわけではないことは、すでにこれまでに論じてきた。

巻四の一の本話における狂気の娘と梓神子は、重層世界における狂気の憑いた若菜摘みの女と静御前の霊に重なる。重ねら

れた謡曲『二人静』の美女二人の霊という趣向は、次章卷四の二「歌の姿の美女二人」に展開する。

注

- 1 羽生紀子『新可笑記』の重層性―巻頭章と草薙の剣盗難事件―（『日本語日本文学論叢』第十四号、二〇一九年三月）ほか十五編の論考において、卷一から卷三について論じた。
- 2 羽生紀子『新可笑記』卷三の五「取りやりなしに天下徳政」の検討―鎌倉幕府第九代執権北条貞時と永仁の徳政令・霜月騒動・平禅門の乱―（『武庫川女子大学紀要』第七十卷、二〇二三年三月）
- 3 冒頭文中の「摂津の国伊丹の城主」について、「天正二年（一五七四）から七年まで城主であった荒木村重を想定したか」と指摘している（五六八頁・頭注六『井原西鶴集④』〔新編日本古典文学全集〕小学館、二〇〇〇年）。
- 4 以下『新可笑記』本文は、『井原西鶴集④』（広嶋進校注・訳「新編日本古典文学全集」小学館、二〇〇〇年）による。
- 5 『源平盛衰記』は、『新定源平盛衰記』第五卷（水原一考定、新人物往来社、一九九一年）による。
- 6 『平家物語』は、『平家物語②』（市古貞次校注・訳「新編日本古典文学全集」小学館、一九九四年）による。
- 7 仲沙織「執心」への対処をめぐる物語―『新可笑記』卷四の一「舟路の難儀」考―（『語文』第百・百一輯、二〇一三年十二月）
- 8 『立入左京亮入道隆佐記』は、『統群書類従』第二十輯上 合戦部 卷第五八二（統群書類従完成会、一九二七年）による。
- 9 『信長公記』は、奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』（角川書店、一九六九年）による。
- 10 仲氏前掲論文（注7）
- 11 『歌占』は、『謡曲大観』第一卷（佐成謙太郎、明治書院、一九三〇年）による。
- 12 「歌占」解説（注11）
- 13 『方丈記』は、『方丈記・徒然草・正法眼蔵随聞記・歎異抄』（『新編日本古典文学全集』小学館、一九九五年）による。

- 14 『吾妻鏡』は、『新版全譯吾妻鏡』第三卷（永原慶二監修・貴志正造訳注、新人物往来社、二〇一一年）による。
- 15 『井原西鶴集④』五七二頁の注記
- 16 『吾妻鏡』は、『新版全譯吾妻鏡』第一卷（永原慶二監修・貴志正造訳注、新人物往来社、二〇一一年）による。
- 17 『義経記』は、『義経記』（梶原正昭校注・訳「新編日本古典文学全集」小学館、二〇〇〇年）による。
- 18 細川涼一「河越重頼の娘―源義経の室―」（『日本中世の社会と寺社』第十五章、思文閣出版、二〇一三年。初出・『京都橘大学女性歴史文化研究所紀要』十六号、二〇〇八年三月）
- 19 前掲書（注16）
- 20 『二人静』は、『謡曲大観』第四卷（佐成謙太郎、明治書院、一九三二年）による。
- 21 金井寅之助『新可笑記』の版下」（『西鶴考 作品・書誌』八木書店、一九八九年。初出・『ビブリア』第二十八号、一九六四年八月）
- 22 篠原進「二つの笑い―『新可笑記』と寓言―」（『国語と国文学』第八十五卷第六号、二〇〇八年六月）

（はにゆう・のりこ 本学教授）